

【聞き取り票】

## ヒロシマ・ナガサキを語り、受け継ごう

2013年12月

日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）  
ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会

広島・長崎の被爆から間もなく70年を迎えようとしています。

この長い間、被爆者のみなさんは体と心に深い傷を負い、不安と苦しみを抱えながらも、原爆は人間に何をなし続けるのかを身をもって告発してきました。核戦争の地獄の体験と、被爆者として生きねばならなかった「生」を通じての命の叫びは、国内外の人びとに原爆被害の実相を知らせ、“核兵器は人間と共存できない”“ふたたび被爆者をつくるな”の声を広げてきました。

平和を求める世界の人々と手をつなぎ、地球上から核兵器をなくすためには、“ノーモア・ヒバクシャ”の志を被爆者とともに共有する人びとの輪をさらに広げていかなければなりません。

日本被団協とノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会は、被爆者とヒロシマ・ナガサキを語り、受け継ぐことを呼びかけます。被爆者と受け継ぎ手が協力して、被爆者一人ひとりの声に耳を傾け、語り合い、記録に残す、被爆の体験の継承を取り組んでいきましょう。

そして取り組んだ成果を世界と未来にむけて、それぞれの地域から発信していきましょう。

**[証言者についての基本事項(太線の枠内にご記入ください)]**

記入年月日	2015年 8月 15日	整理 No.	—
ふりがな ご氏名	家島 昌志 (いえしま まさし)	性別	<input checked="" type="checkbox"/> 1. 男      2. 女
生年月日	明・大・ <input checked="" type="checkbox"/> 昭 17年 月 日 (被爆時年齢：3歳)		
現住所	〒		
被爆地	<input checked="" type="checkbox"/> 1. 広島      2. 長崎 [町名：牛田町 距離 2.5 km]		
手帳区分	<input checked="" type="checkbox"/> 1. 直爆      2. 入市      3. 救護      4. 胎内 5. 健康診断受診者証 [一種・二種]      6. 被爆者の子・孫      7. その他		
氏名の公表の可否	<input checked="" type="checkbox"/> 1. 可      2. 不可		

## 1. 被爆したときのことをお聞かせください。

私は6月生まれ、あと少しで3歳2か月になるという時に被爆しましたので、自分の身の回りのことを若干おぼろげに、まばらに記憶しているということで、あまり悲惨な状況を記憶しておりません。それに当時、広島は75年間草木も生えないというわさも立ち、焼け野原になってしまっただけで食料もないという事情もありまして、鳥取県に住んでる祖父、祖母の所へ父親だけ残して引っ越してしまっただけです。したがって、当時の広島復興状況等々をつぶさに目にしたわけでもない。ふたたび広島を訪れたのはちょうど10年後ですか、その時は当時住んでいた家の周りにまだ田んぼも残っていました。しかしその後、近年になってから行った時には、もう私が生まれた牛田の街は高級住宅街に化けていまして、周りの田んぼとか、そういうものは一切ありませんでした。皆さんの参考になるかどうか、また期待に沿うかどうかわかりませんが、記憶の範囲内でお話ししたいというふうに思います。

ご紹介があったように今年のNPT再検討会議に被爆者が48名、それから生協の支援の方91名、その中には大学生協の学生さんなんかも加わっていて、15班編成で行きました。私の4班には早稲田大の仏文3年生の方がエスコートメンバーに加わってくれていまして、その報告書も先日見ましたけれど、なかなかよくまとめられていました。

私どもは国連本部にも行ったんですけども本会議を傍聴する時間はほとんどありませんでした。「平和首長会議」も傍聴しましたが、語られるのは英語とかスペイン語ですからよくわかりません。証言活動をするために次の会場に行くということもありまして途中で抜け出して、私が証言したのは最初の学校がニューヨーク育英学園という日本人学校で小学校1・2・3年生が主体。2番目は近郊にある日本人学校でグリニッジというオックスフォード近くの町でしたけど、グリニッジ日本人学校で主体は5・6・7年生でした。それからニューヨークの私立アベニュースクールという学校の10年生と11年生、日本の高校の1・2年生に当たる社会科のクラスで証言をしました。証言は通訳する時間がありますから10分しゃべれば20分となり、3人しゃべると1時間になってしまう。それで体験を10分程度にまとめて証言しました。

向こうの日本人学校というのは国連の職員もたくさんいるし、日本から出張している職員、言ってみればエリート階級の子供たちも多く、よくできる子どもたちでした。よく物事を理解していて、「今は日米関係というのは一番仲のいい間柄になっているけれども70年前まで日米が戦争をしていたということを知っていますか」と聞いたら全員手を挙げました。日本の小学校1年生にそんなことを聞いても手を挙げる人はいるかないかぐらいかと思うんです。高校生にいたっては社会科の授業の一環なんだろうけれども、あらかじめ国連のロビーで催した我々の原爆展を観てきて、主催者の話を聞いて、自分たちでそれをカメラ撮りして、自分たちで司会をして私たちの話を聞いていました。休憩時間の10分ぐらいの間に生徒たちでグループディスカッションでもしたんでしょうか、その後で私たちに質問を浴びせてくるということで、仕切っている高校2年生はお母さんが埼玉県出身ということでしたけれど、顔つきはもう全くのアメリカ人、日本語と英語を全く同程度に使えるということで、質問なんかも彼が全部通訳をしてくれて我々の手助けをしてくれました。日本の社会科の授業といったら教師が一方的にしゃべって終わりというのが我々の時代では普通だったので、アメリカの自分で考えさせる社会科の授業というのはずいぶん違うし、考える力を養い、理解も深まる感じを深く受けました。



さて、広島地図で見ていただくと、私が生まれたのは右上、北の方の牛田町という所です。牛田町というのは広島の中では非常に広いんです。明治・大正時代は牛田村と言いまして、昭和の初めに広島に合併されて牛田町となったので、町の中では一番広いんです。したがいまして現在の被爆手帳では爆心からの距離は町の平均を取る。ちょうど牛田町は2kmと3kmにまたがっていますので 2.5 kmというふうになっています。私の最初の手帳では 1.8 kmと記してありまして、東洋工業の松田社長の自宅の近くだったそうです。家の周りは田んぼだったし神社もあって、その神社に私はよく遊びに行っていたそうです。隣の加藤さんの家の1歳年上の子と遊んだことはよく記憶しています。彼がつかまえた蟬を伏せていたコップをパッと引っくり返したら蟬が飛んで逃げてワーンと泣いて、というような事件が度々あったそうで、私にいじめられたというふうに思われていたそうです。私はあまりいじめたという感覚はなくて遊びに行ったりというふうに思っています。

私の父親は爆心から 1.2 kmのところ、逓信病院と並んでいる広島逓信局というところに勤めていました。8月6日は空襲に対する夜警当番ということで屋上で敵機を見張る勤務をしていたそうです。朝の6時に勤務が終わってから家に帰ってきたんですね。そして仮眠しているところへ8時15分に原爆投下された。ピカーッと光ってびっくりして飛び起きて階段の所に行ったら、ドーンと爆風が来て飛ばされて1階まで落とされた。階段の下にはちょうどトイレがあって、その扉をぶち破って落ちたんですけど、そんな大怪我をするということでもなくて命に別状はなかったそうです。私は玄関先で遊んでいたんですけど、その

瞬間の記憶というのはいないんですね。おそらく吹き飛ばされたんだと思いますけれど無事で、特に傷を負うようなこともなかったそうです。お袋は玄関の隣の部屋で、南に面しているところは一面ガラスで陽当たりもよいから生まれてから10か月の妹をいつもは窓の方に向けて陽が当たるように寝かせるんだそうです。ところがどういうわけか、虫が知らせたのか、その日に限って部屋の布団袋の裏側に窓を背にして寝かされていたんですね。そのために布団袋の影になって妹も無傷だったそうです。お袋は瞬間ガラスが粉々に吹き飛んで身体中ガラスだらけになって、近所にたまたま住んでいた看護婦さんの所でガラスを抜いてもらって赤チンかなんかを塗って手当をしてもらい、特に命にかかわるような怪我はしませんでした。

家じゅうのガラスが全部吹き飛んで一枚も残らず粉々になってしまった。台所の水屋(食器棚)にダイヤガラスという分厚いギザギザのガラスを嵌め込んだガラス戸があって、その1枚だけが家じゅうで残ったガラスだったそうです。屋根はめくれて月が見える状態で、そういう所でとても住めないということで後で田舎に引っ越すことになりましたが、このガラス戸は引っ越しの時に田舎にも持って帰りました。

8月6日は、たまたま親戚の娘さんが新婚さんで前夜から我が家に来ていました。旦那さんが8月6日に入営するというので、その朝、入営する新婚の旦那さんを送って出かけたそうです。西練兵場というのがある、おそらくそこへ行ったんだと思うのですが、ここはもう爆心から600~700mの所ですから探しに行ったけれども兵隊さんはみな炭のように真っ黒焦げになって転がっている。自分の息子だったら何か特徴を見つけて探すことができたかもしれませんが、前夜に親戚の娘さんが連れてきたばかりで顔もろくろくわからない。そういう状態ですから黒焦げになった死体をみても見分けがつかないわけです。散々探し回ったわけですけど結局わからないで我が家へ帰ろうとする帰り道で、その親戚の娘さんもご主人を見送った帰りだったんでしょう。大火傷をして道端に転がっているのを見つけた。その娘さんだけでも救って帰ろうとして手を出したそうですけれど、首から胸から手から大火傷していますから持ち上げれば皮がずるっと剥けそうな状態で。成人ですから担いでも帰られずに、いったん家に帰りまして、隣の農家から大八車を借り出して箆を敷いて、それでまた駆けつけて大八車へなんとか乗せて我が家に連れ帰りました。そして先ほどの話に出てきた看護婦さんにチンク油をもらってきて手当をした。当時は市内は混乱状態で救護所でも全く薬はないといった状況でした。せめてチンク油を塗ってあげられたのは看護婦さんが近所に住んでいたおかげだと思います。

当時、牛田の町は爆心地から2.5~3kmの所もあるので、爆心から逃げてくる人がたくさんいたそうです。その人たちは両手の皮が剥けてぶら下げている状態で、できる限りは手当をしてあげたそうですけれどもチンク油や赤チンを塗る程度の手当しかできない。

収容施設すらありません。家の中で寝かせるのは親戚の娘さんだけ。真夏のことでですからすぐに蠅が卵を産みつけて蛆が湧く。蛆が湧くような状態の火傷というのは本当に強烈なニオイがするんですよ。そのニオイの強烈さは記憶に残っていますよ。私はその新婚の娘さんの所に行って「敵の飛行機悪いね」と言って慰めたそうですけれど、そういう言葉をかけてくれたとその人から後から聞いたので、私がそういうことを言って慰めたということは自分では覚えておりません。その人もいつまでも療養しているわけにもいかないので出身地の島根県へ帰りました。

それと牛田の街から西の方、己斐の山が真っ赤に燃えているのを眺めていたのを覚えています。三日三晩燃えたそうですけど、僕は広島は焼けているのを眺めたと勘違いしてたんですが、あれはやっぱり広島は焼けているんじゃないかと山火事を見たんだなと。というのがはっきり目に焼き付いています。希薄な私の経験ですけども、以上でお話を終わらせていただきます。有難うございました。

2. その後の人生についてお聞かせください。

3. いま、被爆者として訴えたいこと、世界と次世代の人々にこれだけは伝えておきたいことをお聞かせください。

私も鳥取県出身ということになっていますけれど、本来は島根県の出身です。島根半島の先端の美保関に「美保神社」というのがあるのですが、その青銅製の手水鉢を7年がかりでつくって奉納したり、そればかりやってたものだから家業が倒産して鳥取県に移り住んだという家なんです。なんで島根の山奥に鉄鋼関係の工場があったかという、ご存じのように「たたら製鉄」が盛んな地域でありまして、祖先は武士の流れではあったようですが、「たたら流し」を生業にしています。明治の八幡製鉄が稼働する前に、鳥取県の日野郡あたりもそうですが、その鉄が日本海軍に納められて軍艦の材料として使われたんです。そういうことに携わっていたようです。

たたらは砂鉄を松の木炭で溶かして造るわけですが、一番いいのは底にたまる玉鋼(たまはがね)、これは日本刀の材料になるいわゆる本当の鋼で、その他に一般の鉄材もできたわけです。今はもうすっかりそういうのは廃れてしまって、実験的に糸原家などがその炉を残していますけれど。そういう家のつながりで江戸末期には松江藩公御成りの間まであって、鉄ばかりではなくて酒を造ったり醤油を造ったり味噌を造ったりとそういう業務と一緒にやっていて従業員が800人はいたというから今日で言えば相当な大企業だったんでしょう。倒産してしまったんで、父親は単なるサラリーマンとして逓信局にいたわけです。

田舎へ帰って、馬車に乗って荷物が着いたということを知っています。当時はトラックなんてそんなにたくさんはなかったですから、荷物運びは馬車。広島から帰る時は芸備線は超満員で窓から汽車に乗せられましたよ。汽車の中でおにぎりを食べたことは覚えているんですけど、そこから先は覚えていません。備中神代(びっちゅうこうじろ)で伯備線に乗り換えて帰るんですけどね。

お袋は田舎に帰ってから髪の毛がもう全部抜けました。被爆した病人を看病するだけで二次放射線を浴びる。今の原爆症認定裁判では一次放射線しか認めてません。そのために裁判がいつまでも決着しないわけです。実際には石の柱であっても人間であっても一次放射線を浴びた物体からまた副次放射線が出る。あるいは放射性降下物、“黒い雨”にあって、そこからまた放射線を浴びる。地域によって人それぞれ、二次放射線を浴びているということがかなりあると思うんです。

私の父親は、一次放射線の時には確かに自宅にいたんで何ともなかった。しかし、急に職場を放棄して田舎に帰るといってもいけませんので、一人で広島に残りました。1年ばかり残って、それからやっと転勤願いがかなって米子の郵便局に転勤させてもらったのですが、それまでは放射線の何たるかというのは目にも見えないしわかりません。だから焼け跡、爆心を掘り返して溶けた壺が出てきたというのを喜

んで持ち帰ったり、兵舎の跡から兵隊さんが使った溶けた剃刀を拾って帰ったり。放射線の何たるかがわかっていたらそういうものは手をつけなかったでしょう。しかし当時は誰もわかりません。ガスタンクが爆発したとか直撃弾が近所に落ちたぐらいにしか、その瞬間はみんな思わなかった。そういうせいもあったのでしょね、被爆から10年後に胃ガンになって胃を全部取り除きました。昭和30年代ごろはガン告知というのはあまりなかったですから、ガンだというのは本人には一切言わないで胃潰瘍だということで。それから10年経った時に上顎ガンにかかりました。私は当時もう東京にいましたが鼻血が噴き出して止まらないという。医者は蓄膿症というけれども蓄膿症で血が止まらないなんていうのは聞いたことがないし、これはおかしいなと思いましたが、米子医大に入院して5か月であっけなく亡くなってしまいました。最後のその時にはガンであるとなんとなく悟ってたようで、「癌という 書きにくき文字 冬灯り」というような俳句なんかを残しています。

父親は本当は東京美術学校に入りたくて、なかなかストレートに入れないから「川端画学校」という予備校ですね、そこに通っていたらしいんですけど、親はカンカンになって一銭も仕送りしない。画家というのは絵具代とかいろいろ金がかかるんですよ。親が一銭も仕送りしないで頑張るといのは大変なことで、アルバイト代だけじゃ腹がすいてかなわん。木炭画というのはパンで消すんですけど、消した後のパンを食べたりして。だけど結局は栄養失調でひっくりかえって送り返されて、それで田舎の郵便局に入れてもらったという経緯で通信局に勤めるようになったんです。

おそらく広島市の街に1年残って、あっちこっちうろつき回った。もちろん勤務先そのものが爆心から 1.2 kmで、今、平和公園にアオギリの木が植わってますけど、あれはそもそも通信局の庭に植わっていたアオギリを移植したものです。通信病院の当時の院長は六高、岡山医大を卒業した先生でしたけれど、大事な額は家島くんの家に預けてある。牛田町に行けば爆撃されることもないし安全だろうということで預けたということが「広島日記」というその先生の手記に書かれた原爆日誌の123ページのあたりに書かれているのを読みました。だから牛田町は当時からすると郊外にあたった。父は当時総務部にいたんですけども、直属の上司の総務課長は天皇・皇后両陛下のご真影を背負って我が家まで避難してきたんですよ。当時の思想ですから「これ以上大切な物はない、牛田町まで逃げれば大丈夫だろう」ということで。家は直接燃えはしなかったのが保管するスペースぐらいはあったのでしょね。隣の家も丈夫な油障子(油紙を障子に貼ったもの)がピカーッと光った最初の閃光で火がついたそうですが、障子紙のことですから火をたたき消して家が燃えるようなことはなかった。そういう地域でした。

父親は1年後に帰ってきたんですけど、そういうことで早くガンで亡くなってしまった。父親が救った親戚の娘さんも再婚されて、小さい時はよく遊びに行ったんですけど、やっぱりケロイドの跡が頬から首、胸にかけてずっと広がってました。だいぶ薄くはなっていたにしても広範囲で皮膚呼吸ができないから夏は暑いんですね。夏になると暑い暑いと言ってらっしゃいました。この方も甲状腺ガンで亡くなってしまわれましたけど、これは被爆の影響以外何ものでもないと思います。しず子さんといいましたけれど、その方には子どもがあったのですが脳に障害をもつ子どもさんでした。施設に入っていましたけれど、今はどうしているか。二重の苦しみを味わった人生でした。娘さんもいたのですが結婚したかどうか、長いことずっと一人でいましたからね。多分結婚もせずはまだ田舎暮らしをしているのでは、と思ってます。広島から逃れてきた通信局の人たちは2、3人おりましたね、毎年8月6日には代わり番に集まって、無事に生き延びたこと

を祝賀する宴をはっておりました。

私は平和祈念式典に出たのはずっと後、東友会に入ってからです。広島は2、3度訪れたことはありまして、原爆資料館であの悲惨な被爆の様子は知っておりました。しかし、なかなか活動に加わるということは、私は郵政省に勤めてたんですけれども国会なんかあると、あるいは予算編成になると夜中の1～2時に帰るというようなことも多々ありまして、東友会の会員ではあったけれども運動に加わるという時間がなかった。年休も取れないで40日ぐらいつもプールしてありましたから。今ではそういうことは禁止されていますけど、当時は夜中まで働かせるというのが官庁の実態でした。

私は幸いにして逓信病院に12～13回ぐらい入院して10回ぐらい手術しましたが、でもいわゆる原爆病に該当するような病ではなくて、胃潰瘍であったり十二指腸潰瘍であったり膀胱結石であったりというようなことで特に命にかかわるような病気はなかった。今は若干老人になったせいでしょうかね、白内障等もありまして、いずれ手術しなければいけないだろうというふうには思っていますけど、放射線起因による白内障というようなことでは多分ないと思います。

広島で白内障の原告が2名勝訴しましたけれど、厚生労働省というのはできるだけ経費を少なく負担する、確かに厚労省というのはいろんな業務をたくさん抱えていましてね、原爆症だけじゃなくて水俣病あるいはイタイタイ病、その認定でも未だにその認定するしないというのは闘争が続いているんです。原爆症についても同じでありまして、このところ集団で訴えた裁判で勝ってからは認定数は8000人台でしょうか。最初は1000人ぐらいしか認められた人がいなかったんですけれども、それでも却下される人も多い。集団訴訟後の今闘っているノーモア・ヒバクシャ訴訟では原告は東京が一番多くて30人ばかり、全国で109名ですか訴訟を起こして闘っています。しかし私と同じで低年齢被爆の人の訴訟が増えていまして当時の記憶がないんです。だから母親や父親に背負われて爆心まで行ったけれども、当時は爆心に入ったということは言わない方がいいと被爆手帳を申請する時にそういうことを書かなかった。むしろ隠すというような傾向があったために、それが災いして、本当にお袋に背負われて爆心に入ったのか、その証拠を出せ、というようなことを極端に言うと厚労省は言ってくるんです。証人はもういない、親は死んでいる、本人自身も老化して実際にほとんど覚えていないようなことを根拠に裁判を闘うわけですから、非常に苦しい立場に追い込まれています。

裁判は公正に進めていると思うのですが、判決を受けても厚労省はそれを改善しようとしません。だから「いずれ被爆者が死に絶えるのを待っているのか」とこういう声が聞かれるのはもっともだと思います。

被爆者は年1万人単位で亡くなっていきますから、東京の被爆者も今は6000人を切ってしまっていて被爆二世の方が逆に多くなっています。最盛期は東京で1万人を超える被爆者が運動をしたけれども、私の区内だけみても昔活躍して証言集を残した人たちはほとんど亡くなってしまいました。当時を証言できるような方は80歳以上の小学校の高学年から中学校にいた人。3歳とか2歳の方は覚えていない。杉並の前の会長だった人は4歳だったけれど全部覚えているとおっしゃってますが、そういう記憶力のいい人は例外的で、やっぱり小学校の高学年から中学生というのが一番ものごとをよく覚えているんです。

10月29日に第一次訴訟は判決が言い渡されるのですが、厚労省は35人の御用学者連盟の意見書を添えて放射線の影響はないというような反証を出しています。目には見えない影響があるというのがやっぱり被爆の一番恐ろしいところです。



福島もメルトダウンした燃料を取り出す方途だってまだまだこれから研究するというで全く目途がついていない。福島より条件のよかったスリーマイル島の事故でも燃料を取り出すのにあれだって10年かかったんですから。スリーマイル島はあと18年ぐらい今のまま封鎖して、それから取り壊しにかかるんですが、そうすると事故から50年が経ってしまう。福島は甘いことを言っているけれども、おそらくそれ以上かかるだろうと思います。なんせこれから研究するわけですから。近づけないからロボットでやるということだと、そのロボットから開発していかなきゃいけない。チェルノブイリの場合は今はコンクリートで閉じてますけれども、主力のプルトニウムの半減期が2万5000年なんです。当該区域に近づけるようになるのは10万年先なんです。10万年といったら次の氷河期がくる、人類が地球に生きていられるかどうかかわらんような年月をかけなければ入れるようにならない。

三鷹在住の方で被爆者でもある放射化学者の佐野博敏先生によりますとね、放射線の中には半減期が140億年というトリウム232のようなものもあるんです。太陽の寿命があと50億年と言われてますから、そうすると永遠に永久に無くならない、そういう種類の放射線なんですね。

日本政府も世界の学者もそうですけれども、今は高レベルの放射性廃棄物をどこかに保管しておいて、その処理方法を先の人類が開発してくれるのを待つと言っています。おそらく全然間に合わない話だろうと思うんです。どこかに埋めなきゃしょうがない。外国で引き取ってもらうという話にはならないと思う。国内ではおそらくどこの県も引き受けませんよ。そうしたら永久にプールに閉じ込めておくのかと言えばそれもできない。一部医療に使うコバルトとかを除いて、まず「平和利用」と言って人類が手をつけるべきものじゃないと思います。

原爆開発を進めたマンハッタン計画の当事者だって、爆発の威力は確かに承知していたけれども、晩発性の障害が起こるといふ放射線の怖さ、威力というのは全く想定していなかったそうです。原爆投下後、9月ごろでしたかマンハッタン計画の次席責任者だったファーレル准将は東京での記者会見で「広島・長崎で死ぬべきものはみんな死んでしまった。放射線の影響はもう全く残っていない」といふような馬鹿な発言をしましたが、70年経ってまだ原爆症の認定を巡って裁判が続いている。被爆二世・三世の問題もあります。放射線影響研究所の去年の展示を見た時に「二世への影響はみられない」といふ展示があったんです。その言葉に山本副会長が「影響がないということはないんじゃないか」と噛みつきましてね。説明員に噛みついたってしょうがないんですけれど、彼らはたとえば1000人の健常者と1000人の被爆者を比較して成人病の発症率を後追いしているわけです。その時の二世の人の平均年齢は40歳台でしたかね。次の健康診断の時の統計には変化が現れるかもしれませんということで逃げてました。

放射線に弱い人と強い人とがあるんです。被爆者と健常者を比べているといつても、要するに結局一番放射線に強い人と健常者を比べている格好になっているんです。弱い人はもうみんな死んでしまいましたから。そういうことからする比較統計といつても正確な統計じゃないんです。いつかNHKで当時、長崎医専で被爆した大阪の会長をやったことがあるという人がインタビューで「自分は長崎医専にいて生き残った」と話していました。私も長崎慰霊団に加わって今年行きましたが、長崎医専というのは爆心から700～800mの地であってほとんどの人の名前が死没者として記されているという状況です。当時、長崎大学の医学部に190人、軍医を養成するための医専にその倍ぐらいの380人ぐらいがいて、その中で生き残った人です。県庁に報告に行けとかいろいろこきつかわれて、その後、東大医学部を出て大阪でお医者さんをされていた方です。「大病もせず今日まで生きてきた。自分は放射線に強かったのだら



う」とおっしゃってました。だからそういう人と比較しても疫学的な参考にはならないと思うんです。

核は人間の手に負えるものじゃない、絶対に廃絶しなければならないという思います。私はアメリカの学校でもそう訴えてきました。

※被爆の実相を伝え残すため、あらためて詳しくお話をうかがうことはできますか？	<input checked="" type="checkbox"/> 1. 可	<input type="checkbox"/> 2. 不可
--	--	--------------------------------

### 【聞き取りをおこなった方の記入欄】

聞き取り日時	2015年 7月4日(土) 13時半～15時半	場所	主婦会館プラザエフ5階会議室
聞き取りをされたのは	1. 個人 <input checked="" type="checkbox"/> 2. グループ [名称:ヒロシマ・ナガサキを語り、受け継ぐつどい] 参加者: 9名		
聞き取り票記入者	三崎 敬子	TEL/メール	
連絡先住所等	「ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会」事務局		

4. 聞き取りの感想、受け継ぎ手として世界と次世代の人々に伝えたいことをお書きください。

### 【証言を聞いて～ディスカッションの概要～】

〇〇: 体調は大丈夫だったということですが、戦後、ご家族とかご自身とか親戚とか今までで偏見とか差別とかそういうことに悩んだということはあったんでしょうか？

家島: 戦後広島で生まれたことは、郵政関係の私の知っている2、3人以外は知りません。姉2人は広島で生まれましたが、広島はあまり食料もないし、空襲でもあったら危ないということで、山陰の祖父、祖母さんのところに疎開して、そこから学校に通ってました。我々も8月6日に広島にいたということは発表する機会もないし、後遺症が出るという恐怖感もない。偏見とか差別とかあったことはなかったし、ほとんど忘れて生活してたという状態でした。

手帳をとって東京へ来て被爆者の会に入って、被団協や東友会の新聞が送られてくるようになって初めて被爆についての認識を深めたというか、あるいは書籍を読んで深く知るようになったのは長じてからです。学生時代にあまりそういうことを深く感じたことはないですね。ただ、同じ社を被爆者とそうでない方が受けて、そのことが原因じゃないけれど落とされたのは被爆者で。私は採用された方が人物が優れていたと思うけれど、そういうことを病んで自殺した人がいました。その時にはやっぱりぎょっと思いましたよ。やっぱりその人は差別されたと深く心に感じたのではないのでしょうかね。私自身、妹もそういうことを全然気にせず育ってきたし、その下の妹は戦後生まれの被爆二世ですけれども、特に気にするようなこともなく普通の友だちと一緒に育って来ました。姉2人は被爆の影響もなく育って来ていたけれど別の病気で先に亡くなって、被爆した我々の方が生き残ったわけですから、特に自分が被爆者として悩まな

くてはいけないというような局面に遭遇したことはありませんでした。

〇〇:すごい初歩的な質問なのかもしれませんが、原爆症の認定と被爆者手帳をもらうということは違うんですか？

家島:厚生労働省が定めた範囲内で直接被爆した人は1号被爆者。2週間以内に入市した人、例えば軍隊で救助に市内に入った人は2号被爆者です。それから1号、2号被爆者の胎内で被爆した人、お母さんのお腹の中にいた人が3号被爆者。4号被爆者は救護にあたった人です。たとえば庄原の方において広島が大変だから女学生を動員して救護に行けと言われて救護して被爆した人、これは4号被爆者。その人は申請すれば被爆者手帳をもらえるわけです。一定の証人がいれば、証人が全然ないと駄目なんですけれど、しっかりした証人がいてその人が証言してくれて申請すれば手帳をくれるわけです。ただ原爆症に認定するというのは定められた病気があるんです。ガンであるとか白血病であるとか。心筋梗塞であるとか、白内障であるとか、被爆の放射線の影響で罹患したと思われる病気で治療の必要があるということを経験者の証明をつけて申請して認定して、認定された場合、医療の給付と13万円ぐらいの医療特別手当が支給されるんです。

ただ手帳を持っているだけでは、私なんかもそうですけれども、医療の助成を得られるだけ。医療特別手当をどうして定めたかという、原爆症になって生活できないということで当時の生活保護の最低水準ぐらいの手当を出せば病気と闘いながら暮らせるだろうということで13万円の額というのが決められたらしい。それだけの大きな違いがあるわけですね。だからどうしても原爆症と認めてもらいたいという人は厚生労働省に申請を出して、却下されたら裁判にも訴えて、裁判で勝った人が集団訴訟で300人近く。その後のノーモア・ヒバクシャ訴訟で109人裁判を起こして今認められている人は20人ぐらい。もちろん厚生労働省はそれを不服として控訴している場合があつて裁判係争中のものもあります。

〇〇:手帳を申請して認定されるためには承認が2人いると聞いたことがあるのですが、そうなんですか？1人では駄目なんですか？

家島:そうです。手帳をとるためには証人が2人います。証人がなければ、各地の被爆者の会に連絡して証人を探してくださいということで、その地区の会報に載せて探してもらったりするんです。なかなか今の時点で証人を探すという人は大変なことなんです。我々はもう昭和30年代に父親が勝手に、当時はたくさん証人も生きてましたから、広島牛田町に住んでいたということを証明してもらって僕の知らないうちに手帳を申請して交付されている。だから僕はそれをずっと更新更新で持ち歩いているだけです。

〇〇:でも今後だんだん少なくなっていくということから証人を探すのは難しいですね。

家島:これからは大変ですよ。それといわゆる学童疎開をして広島を離れている間に原爆が落ちて両親が亡くなって孤児になったという人は捨て置かれています。被爆していないから対象外なんですね。だ

から被爆者運動の一つに亡くなった人を補償しろというのがある。そうしたら孤児の人も補償が受け取れるわけでしょ。そういう措置をしろと言ってるけれども、国は「戦争の被害は等しく受忍すべきである」と言ってるわけです。そういう人は永久に救われないというのか、一番可哀想な人たちです。

〇〇:はい。今ちょうど私は手帳の取得の経緯をお聞きしようと思っていました。そうしたらちょうどお話に出たのですけれども、お父さんが家族の分をまとめて一緒に申請しちゃったということですか？そういうことができるんですか？

家島:申請書に私の名前で書いて、証人は当時広島にいて一緒に引き上げた上司の人になってもらって。僕は一切書いた覚えがないから、子どもがまだ小さいからということで手帳取得のために親が申請したという人はいっぱいいますよ。

〇〇:やっぱりその方がゆくゆく子どものためにいいと思ってですね。

家島:当時やっと手帳がとれて医療補助が受けられるようになったということで、将来役に立つからということで申請したようです。僕は当初はそんなものが役に立つとは思わなかったし、普通は部内病院で医療行為を受けるでしょう。手帳を見せてもハイって返されるわけです。全然、恩恵がなくて通用しない思っていた。

〇〇:通信病院ですね。

家島:広島通信病院ならわかる。だけど東京通信病院は勉強不足でわからない。今は民営化になったので受付から何からみんな外注してるわけです。そうしたら彼らは一生懸命勉強しますから、ちゃんと今は医療補助を受けられるようになった。だからずいぶんと無駄にお金を払ってきましたよ、12、3回入院したわけですからね。最後の退職してからの4、5回はひっかかりましたけど、それまでは全額自己負担で払ってきました。

〇〇:原爆が落ちてから田舎に帰られたのはどれくらい後になるんですかね。

家島:9月か10月ぐらいだと思います。

〇〇:ご本人も妹さんもその後いわゆる放射線に起因されると思われるような病気はなかったということなんですけれど、お母さんは鳥取に行ってから髪の毛が抜けりという急性症状があったわけですね。

家島:髪の毛が抜けて頬かむりしてました。

〇〇:ご本人や妹さんにはそういう急性症状は出なかったということですか。

家島:そういう症状はちょっと記憶にありませんね。

〇〇:手帳をとられたのは昭和の何年ぐらいになりますか。

家島:昭和39年ころでした。

〇〇:原爆医療法ができたのが昭和32年、12年後だから手帳を取られたのは6～7年ぐらい経ってからってということになりますか。

家島:僕は昭和40年に東京に生まれましたから。だから昭和39年に東京に行くんだらということでもったんじゃないですか、父親は。将来役立つだろうからと。

〇〇:進学で出たんですか。

家島:就職で出ました。

〇〇:NPTに行って高校で証言をされた時にいろんな質問が出たということでしたけど、どんな質問が向こうの高校生から出ましたか？向こうの若い人たちがどんなことに興味を持っているとか、聞きたいと思ったのかを知りたいので。

家島:小学生は、たとえば東友会の事務局員も今回一緒に行ったんですが、亡くなった方2人の事例をお話したんですけど、「村田さんはどういう思いで被爆者と接してこられたんですか」と小学校4年生が、僕から言えば非常に高度な質問を浴びせてきましたね。高校生は、広島に落ち、それから長崎に落ちた。その間、日本政府はどういう手を打ってきたのかという質問がありました。何も手を打たなかったんですけどね。

〇〇:よろしいですか。あとは質問を変えて、6月13日にはNPTに行かれた大学生協の若い人や継承する会の会員さん、NPTに日本被団協の代表として参加された方お二人から現地のお話をお聞きするお茶会をやりました。その中で、現地で若い人が活躍をしているのを見て、これからは若い人たちにもっと頑張ってもらわなきゃということを強く感じたということをお話の方がおっしゃっていました。先ほどお話があったようにどンドンどンドン被爆者で当時のことを語れる人たちは必然的にいなくなってしまう。そういう中でやっぱり全然経験のない若い人たちがそういうふうに頑張っている姿を見て感じる事とか家島さん自身はありましたか？

家島:僕らの担当は小学校、中学校、高校生だったものですからね。ただ思ったのは、5年に1回のNPT再検討会議の時だけ取り組まれるものですから、行った学校じゃそういう取組みは初めての学校ばかりでした。だから5年前だと1年生の人が6年生になるわけですけど、5年前に被爆者の話を聞いたと

というような学校には出会いませんでした。大学で話をした人もおりますけれど、大学生も卒業するわけで5年前に話を聞いたという人はほとんどいない。5年毎じゃあまりにも少なすぎるなどという感じはしました。副会長のYさんは別のグループで、「ヒバクシャ・ストーリー」という団体の招待で行かれたんですけど、彼女は12校、学校を訪ねて証言をされているんですね。それをNPTの年だけじゃなくて毎年渡ってそういう証言活動をしておられるから、そうするとかなり広がらざるわけですね、被爆の実相が。だから経費の関係で毎年行くわけにはいかないかもしれないけど、もっと語り部を育てて話すとか、そういう活動が必要なんじゃないかって思いました。たとえば国立市が、いま語り部を育てようと募集しているんです。いま東友会から2人参加しています。20人語り部を養成するという講座です。年間通じて4月からずっと講義して12月に終るのか3月に終るのかちょっとはつきり聞かなかったけれど、年間を通じて語り部養成講座、最後には相手が聞き取りやすい話の仕方とかの講義をNHKのアナウンサーかなんか呼んでもたれるみたいですよ。そういう取組みを行政がやってくれるというのは非常に有難いことだし、必要になるんじゃないかと思えます。そうしないと被爆者だけじゃ、とても続きませんから。たまたま東友会から参加した人は被爆者ですけど、全然関係ない市民を対象に講習をしているわけです。あそこは一橋大学があるせいもあるんでしょうけれど、一橋大学の先生にアドバイスを受けてそういう講座をもっている。これは都内では非常に先進的だと思います。広島市もうそういう取組みをやっていますよね。

もうそうしないと被爆者も年をとって語れなくなる人もいるし、若い人は経験が少ない。若い被爆者でも身内や隣のおじさんの話を組み合わせたりして、ある程度実感のこもった話のできる人もいるんですけど、それからまた年齢が下がっちゃうとね。ホント新しい語り部として養成していかないと後に続かないということになってしまいます。

〇〇:5年に1回では少ないっておっしゃいましたよね。どうせ50人行くなら、もっと語り部を育ててとおっしゃったのは、要はNPT再検討会議の5年に1回だけじゃなくて、人数を絞ってもいいから、毎年は無理でもとおっしゃったじゃないですか。ということは1年おきとかでも独自のそういう向こうに伝える活動をした方がいいんじゃないかということですか。

家島さん:そういう気持ちはあるけれど、財政的に非常に難しいでしょうね。一時的に、例えば今年は被爆70年だからそのためのイベント経費を集めようということで東友会では700万円集まりました。我々自身もカンパしましたけどね。それで原爆展や派遣費なんかを賄いました。そういう周年記念行事をやる場合は集まるかもしれないけども、なかなか恒常的に毎年派遣する人間を集めるというのは難しい。

5年の途中に会合があるんですが、オスロ会議とか、ジャナリット会議とか、ウィーン会議やってニューヨークで会議して本番。5年の間の会議に被団協として事務局長と次長と2人ぐらい派遣するのに四苦八苦してますよ。彼らはその場で証言時間はあるんですけどね。今度の本会議の場合は、「田中さん、2分間証言してください」って。2分間なんてもう何をしゃべれますか。核兵器廃絶してくださいで終わりですよ。で、そういう制約だから、あそこだけでしゃべったんじゃ……。そりゃ国連の代表団に聞かせるのも必要ですけどね。やはり小さいうちから学生にもそういう悲惨な物語は聞かせておく。ま、アメリカの教育ではね、原爆落として早く戦争が終わってよかったというような調子ですからね。本当の実態はわからない。

〇〇:最後のところで、これからどんどん証言する人が少なくなっていくし、どういうふうにしていこうかという話が家島さんからありました。これから発信していかなくちゃならない世代として、今の話を聞いてどんなふう感じたかということをYさんとMさんから。

Y:まず私は、小さい時から長崎出身ってことなので、祖父が被爆者ってことなので。

〇〇:どこになられますか。

Y:実家は長崎の外海(そとめ)という所で。

〇〇:ちょっと離れているね。遠藤周作の記念館(遠藤周作文学館)がある。

Y:そうです。そのへんなんですけれど。だから被爆者の証言とかはけっこう小さい時から聞いてきたことがありました。今、大学生になってこれからの社会を担っていく立場にもうなったので、そうなった時に被爆者手帳とか原爆症のこともあまりよくわからなかったのも、そういうこれからは被爆の影響だけじゃなくて、そういう社会の制度とかそういうことも学ばなくちゃいけないと思いました。

〇〇:政経学部ですか。

Y:違います。人間科学部という、心理とか福祉とかの勉強です。ですから福祉制度とかを勉強するんですけど、でもこの被爆者とかはあまり詳しくなかったのも。

M:私はそのYさんと逆というか、30ぐらいになってから長崎に勤務で行って、仕事で勉強するようになって、実際に被爆者にお会いしてやっぱりすごく衝撃を受けたことが多かったのも、なんで僕はそこまで知らなかったんだろうなとすごく後悔をしたことがきっかけです。自分は仕事だったのである意味恵まれているんですけども、やはり日本人であるならば知っておかなきゃいけない。他の海外とかの人と話す時も原爆の歴史をまともに語れない人間は多分世界でまともに渡りあっていけないというふうに思います。正直これは確実に全員が知らなければいけないし、自分は発信できる立場なので、それは70年だろうが80年だろうがずっとやっていかないと、歴史っていうのはそれだけ大事なことなんだと思っています。これから、今まだお元気な方がいる間になんとか受け継いでいける方法を探したいなと思っています。

〇〇:お話の中でマンハッタン計画という言葉が出ましたけれども、これがどういったものか、それを詳しく研究していく勉強会があってもいいんじゃないかなと思いました。これを計画していた研究者の人たちは何をやっているのかわからないというような砂漠の真ん中で研究していたそうですけれども、それが原爆につながっていくわけですけども、研究者も何ひとつわからなかったというような状態でマンハッタン計画の実行がなされていたということで、私もよくわからないんですけども、それが果たして本当にどういものなのか知りたいと思います。またマンハッタン計画ではないかもしれませんが、人体実験がアメ

リカで行われたんですけど、それによると何人かの人たちに知らないうちにプルトニウムを注射することがあって、それを何十年にわたって研究してきたそうですけれども、すぐに亡くなった人もいれば何十年も生きている人もいて、まあそういったことも日本語に翻訳されていますけれども、あわせてそういったことも明らかにしていきたい。勉強で明らかにできればと思います。あとまあ南太平洋ではアメリカが核実験をしてたわけですけども、最近になってフランスの核実験が行われていたということもわかって、そういうことも知っていききたいと思います。

〇〇:先ほどの質問の時にもう1本聞きそびれてました。手帳だけとっててもこういう会に入らないままでいる方もいるじゃないですか。だけど東友会に入られて、またその中でお互いにやりとりする中で自分もこういうことをやらなくてはみたいになって、いろいろご証言の活動をやったり役員をやられたりしてくると思うんです。それはどういったことからだったのでしょうか。

家島:会に入ったのは要するにね、在職中は全く暇がなかった。で、退職したから総会に顔を出そうと。

〇〇:お気持ちはあったってことですね、仕事をしている間から。

家島:やっぱり父親をガンで亡くしたのはそのせいだということはわかっていたから。いろいろ医療の手当の関係でお世話にはなったわけですからね。だから、なにか恩返しをしなきゃいけないなど。そういうのはやっぱり一つの平和運動、被爆者の運動に関わること。まあ要するにもう、会に顔を出したらすぐ「お前、名前だけ役員になってくれ」と言われて、ずるずるずるっとなってしまったというのが現実です。

〇〇:だからそういった感じで、本当に人と人とのネットワークがやっぱり大事だと思うんで、こういうことも含めて、またあと職場のいろんな取り組みの組織も含めて、人と人をつなぐ中で若い人たちの参加も得られるようにしていきたいと思います。

Y:私も幼い時からこういう被爆証言を語り継がなくなっちゃいけないっていう責任感みたいなものをもっていたんですけど、今日話を聞いて、なんか私はどちらかというと、もう過去のことだから、被爆者が亡くなっていくから、なんかもう私が語り継がなくなっちゃ、みたいな感じだったんです。今日お話を聞いて今いる、まだご存命の被爆者の方々も守っていかなくちゃいけないなと思いました。だからこれから、過去をみるのもそうだけど、今の現状をちゃんと考えてそういうことも勉強して考えていきたいなって思いました。これからも見て行きたいなと思いました。

家島:やっぱり証言を継承していこうということですね、どういうふうにされるのか。国立市の取り組みみたいに語り部を養成していこうとするのか、ただ証言を記録してそれを保存しようとするのか。私もよくわかりませんがね、やはり後に残していく、継承をしていくというのは非常に大事なことで、私もニューヨークで3回証言をしたのと、原水禁の大会の代表になった時に証言をしたのと、それから中野区の中学



校で今年70年ですから、全中学校の生徒に被爆証言と空襲の証言を含めて聞かせようという取り組みがなされているんです。珍しいことですが、中野区としては。そこで証言したのですね、今回で6回目ぐらいなんですけどね。ですから、本当はその悲惨な現状を記憶にとどめているわけじゃないんで、僕らの出番はないというふうに当初思ってたんですけどね。一つのきっかけとしてやはり役に立つことは伝えていこうというふうに、今後とも取り組みたいと思いますので、非常に有難い機会をつくっていただいたと、こういうふうに思います。どうも有難うございました。